

特集 文芸研50回記念大会報告号

【特別企画】子どもたちにもたちに渡したい

核II原子力のない未来 小出裕章

文芸研50回記念大会シンポジウム

西郷文芸学50年と国語教育

西郷竹彦 足立悦男(司会) 綾目広治 松崎正治 山元隆春

近代文学研究と西郷文芸学／異化論と典型論／虚構論／文芸学と文芸教育／脱II文学研究／西郷文芸学の教育内容論と世界観／認識・表現の系統指導案／「二世紀型能力」批判／仏教的の世界観／読者をめぐる問題を中心に／絵本「こうえん」で「四つのお話」／読者の存在性／西郷模式図／西郷文芸学と読者論／西郷先生登壇／文芸研を始めた頃／相補・相関の世界観とは

子どもの認識力を育てる
実践理論研究誌

文芸教育

108 2016春

西郷竹彦 責任編集
文芸教育研究協議会

足立悦男

木下康光

倉津和良

清水ひさし

野澤正美

【文芸紹介】小説でたどる教師像の空想

【文芸紹介】生命の多様性を尊重し人間の豊かさを願う

【連載】文学の中の鳥⑥ カンガリ

【連載】詩集「かなづた」①

【随想】西郷文芸学とも小学校教師として生きて自分の力がたせるかぎり

●文献紹介

「多元的共生社会が未来を開く」尾関周二著（農林統計出版 本体二〇〇〇円）

生命の多様性を尊重し人間の豊かさを願う

木下康光（同志社大学名誉教授）

今日私たちの社会は少子高齢化、年金と介護の問題、高い失業率、非正規雇用の増大と格差の拡大、それに伴う社会不安の増大、さらには成長一辺倒の経済活動の結果としての地球温暖化や環境破壊、資源の枯渇など多くの解決困難な問題に取り巻かれ、将来への展望をまったく見出すことができない状況に陥っている。とりわけ高度経済成長期の後に生まれた若い世代の人々にこの閉塞状況から来る絶望感、虚無感は大いだろうと思われる。こうし

た諸々の軋轢や矛盾の究極の帰結としての戦争の危機すら感じさせるこの閉塞状況はどうすれば打開でき、未来に希望を持つことができるのか、本書はこの喫緊の課題に真正面から答えようとする。

その答えは本書のタイトルにずばり示されているが、その答えへと至るのに著者はまず、狩猟採集時代から栽培農業を経て、国民国家と資本主義と科学技術によって成立した近代にいたる人類の歴史を、とりわけ人間―自然関

係と人間―人間関係という二つの視点から回顧的に総括する。そして「近代以降の人間の自然へのコミュニケーション的態度の喪失と、人間相互のコミュニケーションの態度の喪失と、人間相互のコミュニケーションの態度の喪失は相関している」と指摘する。すなわち自然環境破壊と人間間の競争的な生存競争は、ともに根を同じくする精神態度に由来する事態だといっているのである。近代科学は実験によって誕生したのであったが、実験とはそれ以前の、対象たる自然をただ忍耐強く観察するだけの謙虚な態度とは異なり、対象に直接手を加え、不自然な仕方ではいわば拷問にかけることによって秘密を白状させようとする、暴力性を孕んだものであった。

人間の福利増進を願うヒューマニズムよりも、むしろ利潤追求を目的とする資本主義的欲望と結びつくことによって促進された近代科学技術は、この



栗原 史郎
＜農＞の哲学による3・11後の構想力
人類史から現代と未来を考える

体を変容させて生産力を作り出す技術である。」と言って両者の本質的な違いを明らかにしながらも、「（農）を強調することは、工業を否定することで、工業を適正な規模にして自然生態系システムの循環の中に位置づけることが重要だ」と言って、脱工業化社会の姿として「農工共生社会」を提唱するのである。

*

脱近代（ポストモダン）・脱工業化社会の鍵を握るのは（農）の復権とされる。自然との共生としての（農）の

によって営まれる、共生とは正反対の姿なのである。

*

「自然へのコミュニケーション的態度」とか「自然との共生」という言葉は、自然を単なる利用対象でなく、対等の主体と観ることに基づいている。ここで読者の中には宮沢賢治の短編『狼森と筑森、盗森』に描かれた、森を拓く人間の森との対話を思い出す人があるかもしれない。そこでは人間がなにかをしようとするとき、必ず事前に森（＝自然）に問い、許しを求めたのだった。これと同様に、人間と自然の共生の一形態たる（農）とは人間と自然との対話である、と言うことができるかもしれない。そして人類史とは自然との対話の歴史なのであり、ホモ・サピエンスの名の通り知恵を持つことにより自然から一步はみ出した

存在としての人間は、己の本源たる自然との永久的対話を通じて自己認識に至るのだ、とそんなふうにつながって言うことができるかもしれない。

もつとも、著者の議論はそんな漠然とした一般論・抽象論の方に向かっては進んで行かない。ここで議論は極めて具体的な形を取って問題解決に向けての提言となる。すなわち、「農的技術は対象である動植物・生態系の創造力（生産力）と人間の生産力（創造力）との協力によって食物を中心とする生産物を作り出す技術である。働きかける対象は生命体であることによって客体であると同時に相手（主体）でもある点で工的技術とは違ったものにならざるをえないといえよう。工的技術の対象は、本来的には非生命体（客体）であり、もっぱら人間の生産力（創造力）を使用することによって客

再生の姿としては、復活した里山や水田の風景とともに、たとえば「半農半X」のような自給自足の要素を持った生活形態や、原子力発電とは対極の自然エネルギーを活用した、エネルギーの地産地消などがイメージされている。著者が（農）をこのように重視するのは、「現代において（農）はたんに食糧生産とかかわるだけでなく、今日では環境・安全・生命・地域・コミュニティ・スピリチュアリティといった現代の思想的キーワードと絡んで現代的な一大問題圏域を形成しつつある。」という基本認識があるからである。〈農〉の復権によって期待されるのは、自然との、生命一般との関係性の回復であり、自然環境破壊の抑止であり、食糧自給率の向上による安全の確保であり（現在日本は世界一の農産物輸出国となっていることは周知の事実）、

農産物の工業製品化とより一層の商品化に伴うモノカルチャー化の弊害の防止と除去である。食システムのグローバル化とこれを支配する巨大多国籍企業のアグリビジネスは利潤追求の行動原理から、効率的な単一作物の大量栽培という形でモノカルチャー化する傾向があるが、これは環境破壊を引き起こすのみならず、その商品性から市場の影響を受けやすく、食の安全保障にとつて大きな危険要因と言わねばならない。そして（農）の復権によって東京一極集中と地方の衰退の流れが地方再生へと転換するならば、その先には「農工共生社会」が実現することが期待されるのである。

*

共生の理念はむろん言うまでもなく、わが国においてのみならず地球規模に

においても実現されなければならない。
その際、戦争放棄を宣言した憲法を持つ我が国は世界において多文化共生実現のためのリーダーシップを取る特別な条件に恵まれている、と著者は言う。というのも、共生の前提には非暴力があるからであり、紛争解決の手段として武力の行使は永久にしないと誓った我が国憲法は、まさに対話に基づく共生の理念を体现したものだからだ。平和憲法によってのみならず、過去の多くの歴史的経験と現在置かれている状況―公害と環境破壊、原発事故、高齢化社会、都市化、等々―によって我が国は、まさに脱近代の流れにおいて世界の先頭に立つ条件（あるいは歴史的責務）を最も多く有している、と言われる。そのためにも今日世界を支配しているグローバル資本主義に規制を加えるとともに成長主義の呪縛を脱し、

〈農〉の復権に基づく「環境福祉国家」にならなければならないと説かれる。
社会主義や共産主義の理念が無残に潰えたかに見える一方、他方において資本主義が末期的症状を呈して社会が自壊現象を起こしているかに見える今日の袋小路的状况において「近代を超える持続可能な社会や文明のあり方を構想」するものとして書かれた本書は、暗闇に差し込んだ一筋の光明となる。本書における著者の態度は本質的にオプティミスティックであり、徹底してヒューマニスティックであると言えよう。著者の唱える「多元的共生」という言葉は、生命の多様性を尊重し、人間の豊かさを願う心から生まれたものにちがいない。

